

各関係機関長 様

熊本県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）

令和2年度（2020年度）発生予報第10号を下記のとおり発表しましたので送付します。

令和2年度（2020年度）病害虫発生予報第10号（1月予報）

I 気象予報：令和2年（2020年）12月24日福岡管区气象台発表（単位：％）

◎向こう1ヶ月の気象予報（単位：％）

予報対象地域	要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
九州北部全域 (含、山口県)	気温	60	30	10
	降水量	20	40	40
	日照時間	50	30	20

II 【今後、注意すべき病害虫】

1 発生の概要

作物	病害虫名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
冬春 トマト	灰色かび病	並	やや少	やや少(-)	やや多~少 (-)	降水多~並 (+)	
冬春 ナス	すすかび病	やや多	やや多	やや多(+)	やや多~並 (+)	降水多~並 (+)	
イチゴ	うどんこ病	やや少	並	やや少(-)	やや多~並 (+)	降水多~並 (+)	
	ハダニ類	やや多	やや多	やや多(+)	やや多~ 並(+)	気温低(-)	
	アザミウマ類	多	多	多(+)	並(±)	気温低(-)	
冬春 果菜類	灰色かび病 (トマト除く)	並	並	ナス、イチゴ、キ ュウリ 並 (±)	イチゴ やや多~並 ナス 並 (+)	降水多~並 (+)	



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

「<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>」

作物	病害虫名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
冬春果菜類	コナジラミ類	並	並	ナス やや多 トマト、イチゴ、 キュウリ 並 (+)	ナス やや多～並 イチゴ、キュウリ 並 トマト 並～やや少 (±)	気温低(-)	
	アザミウマ類 (イチゴ除く)	並	並	キュウリ 並 ナス やや少 (-)	キュウリ 並 ナス 並～やや少 (-)	気温低(-)	

※予想の根拠末尾の括弧書きは、(+)は発生を助長する要因、(-)は発生を抑制する要因、(±)は影響が少ない要因であることを示す。

2 予想発生量、根拠、対策等

◎冬春トマト

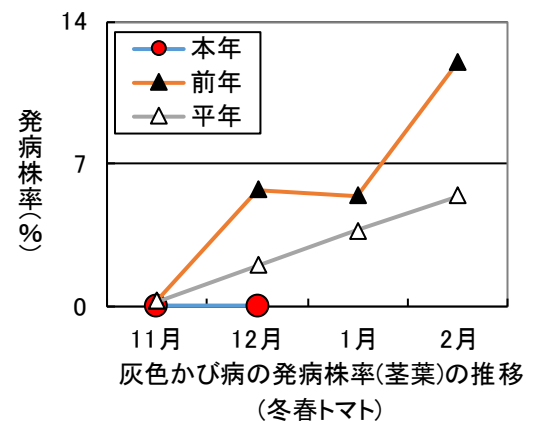
1) 灰色かび病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 12月の巡回調査では、茎葉で発生を認めず(発病株率平年2.0%)平年比やや少であった(-)。

(3) 対策 ア 過度のかん水を避けると共に、温度管理に注意しながら換気に努める。さらに、暖房機等で施設内の空気を循環させ、植物体の周囲を過湿状態にしないようにする。
イ 発病果、発病葉、花卉は伝染源となるので、早期に除去し処分する。

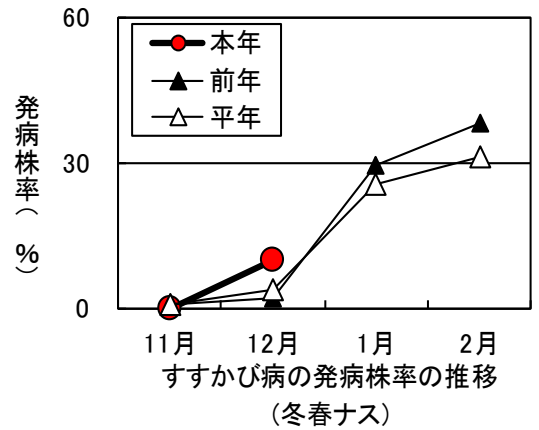
ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎冬春ナス

1) すすかび病

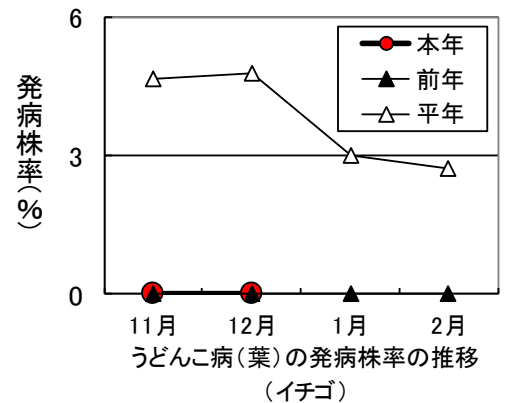
- (1) 発生量：やや多
- (2) 根拠 ア 12月の巡回調査では、発病株率9.6%（平年3.7%）で平年比やや多の発生であった（+）。
- (3) 対策 ア 発病葉は伝染源となるので、早期に除去し処分する。
 イ 過度のかん水を避けるとともに温度管理に注意しながら換気に努める。さらに、暖房機等で施設内の空気を循環させ、植物体の周囲を過湿状態にしないようにする。
 ウ 発病を確認した場合は、直ちに薬剤による防除を行う。散布の際は、散布むらが生じないように、十分量の薬液を丁寧にかける。
 エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎イチゴ

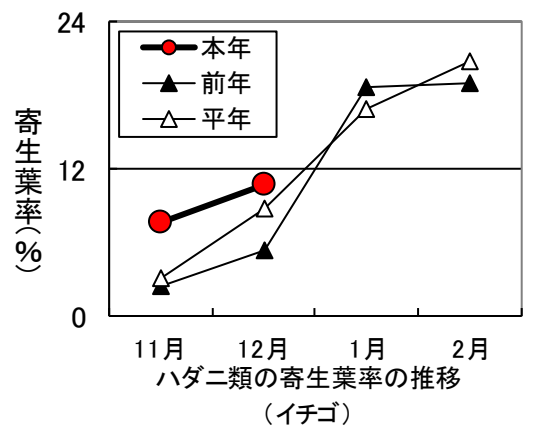
1) うどんこ病

- (1) 発生量：やや少
- (2) 根拠 ア 12月の巡回調査では、葉で発生は認めず（発病株率平年4.8%）、平年比やや少であった（-）。
- (3) 対策 ア 発病葉は早めに取り除き、ほ場外で処分する。
 イ 多発後は防除が困難なので、初期防除を徹底する。
 ウ 薬剤防除は葉裏に十分かかるように散布する。
 エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



2) ハダニ類

- (1) 発生量：やや多
- (2) 根拠 ア 12月の巡回調査では、一部多発ほ場が見られ、寄生葉率10.7%（平年8.8%）で平年比やや多の発生であった（+）。
- (3) 対策 ア 寄生葉を早めに取り除き、ほ場外で処分する。
 イ 寄生密度が高くなると防除が困難なため、発生初期に防除を徹底する。
 ウ 薬剤は下位葉の葉裏にも十分かかるように散布する。
 エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



3) アザミウマ類

(1) 発生量：多

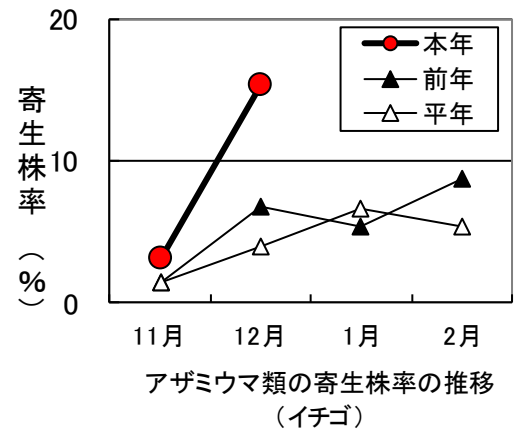
(2) 根拠 ア 12月の巡回調査では、寄生株率15.3% (平年3.9%) で平年比多の発生であった(+)。

(3) 対策 ア 厳寒期も施設内では発生が認められるので、花を注意深く観察することで早期に発見し、発生初期からの防除を徹底する。

イ 施設内の雑草は、重要な発生源となるので除草を徹底する。

ウ 薬剤防除にあたっては、天敵や訪花昆虫(ミツバチ等)への影響を考慮し、薬剤を選定する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎冬春果菜類

1) 灰色かび病 (トマト除く)

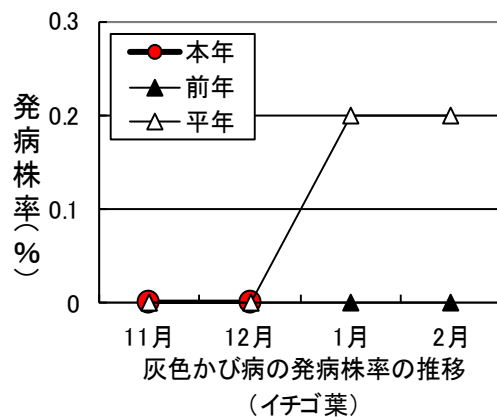
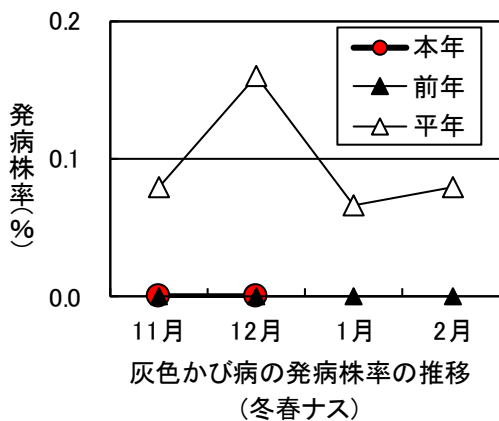
(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 12月の巡回調査ではナス、イチゴ、キュウリで発生を認めず (平年発病株率ナス0.2%、イチゴ葉0.0%、キュウリ0.0%) 平年並であった(±)。

(3) 対策 ア 発病果、発病葉、花卉は伝染源となるので、早期に除去し処分する。

イ 過度のかん水を避けるとともに、温度管理に注意しながら換気に努める。さらに、暖房機等で施設内の空気を循環させ、植物体の周囲を過湿状態にしないようにする。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>

2) コナジラミ類

(1) 発生量：並

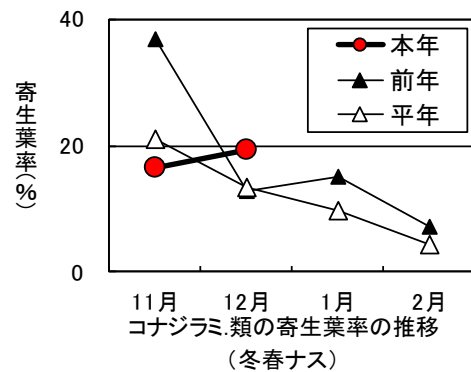
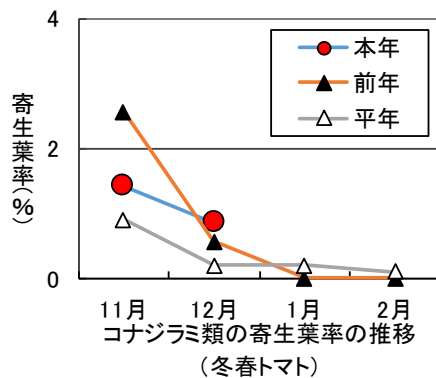
(2) 根拠 ア 12月の巡回調査では、ナスで寄生葉率19.2% (平年13.4%) で平年比やや多、トマトで寄生葉率0.9% (平年0.2%)、イチゴで寄生葉率0.0% (平年0.0%)、キュウリで寄生葉率3.3% (平年3.2%) で平年並であった(+)。

(3) 対策 ア タバココナジラミは、トマト黄化葉巻病、トマト黄化病、ウリ類退緑黄化病、スイカ退緑えそ病の病原ウイルスを媒介するので、トマト、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する(3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病まん延を防止しましょう」を参照)。

イ 施設内部の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。

ウ 黄色粘着トラップ等を施設内に設置し、早期発見に努める。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



3) アザミウマ類 (イチゴ除く)

(1) 発生量：並

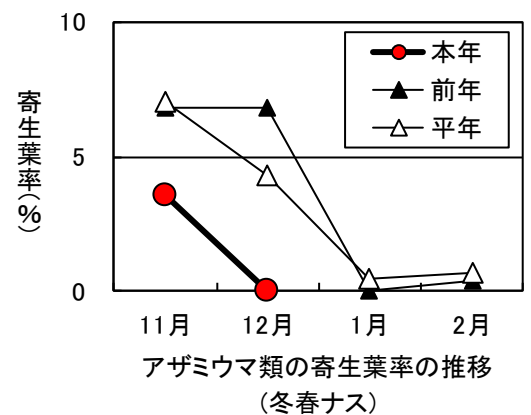
(2) 根拠 ア 12月の巡回調査では、キュウリで寄生葉は確認されず(寄生葉率 平年0.2%) 平年並、ナスで発生は認めず(平年寄生葉率4.3%)、平年比やや少の発生であった(-)。

(3) 対策 ア これからの時期も、施設内では発生が認められるので、粘着トラップを設置し、早期発見に努め、発生初期からの防除を徹底する。粘着トラップの色は、ミナミキイロアザミウマに対しては青色、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色を使用する。

イ ミナミキイロアザミウマはウリ類黄化えそ病の病原ウイルスを媒介するので、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する(3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病まん延を防止しましょう」を参照)。

ウ 施設内の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



3 防除のポイント等

スクミリンゴガイの冬期防除対策について

本年はスクミリンゴガイによる食害を受けたほ場が多く見られました。スクミリンゴガイは土中に潜り越冬するため、次年度の発生量が多くなることが懸念されます。以下の冬期防除対策を実施し、越冬量の低減に努めましょう。

- (1) 厳寒期（1月～2月）に耕起し、土壌中に越冬している貝の殻を破砕する。また、地表面にあげて寒さにさらすことで、貝を死滅させる。
- (2) 耕起は、速度をゆっくり、ロータリーの回転を早めにして丁寧に起こす。また、複数の耕起は効果が高い。

冬季における多湿、寡日照下での病害対策！！

【技術内容】

- (1) 暖房機や循環扇で空気を循環させ、ハウス内の温度むら、湿度むらをなくす。
- (2) 地面をマルチフィルムで全面被覆したり、うね間（通路）やうね上に敷わらを行う。
- (3) 外張（天井）等の結露水は、植物体にかからないように、谷下等へ排水する。
- (4) 整枝、誘引、摘葉等をこまめに行い、採光を良くする。
- (5) 厳冬期（低温、寡日照期）は少量・多回数かん水を心がける（根傷み防止）。
- (6) 液肥を利用した施肥管理を行う（草勢維持）。

【留意事項】

- (1) 最低夜温の確保等、温度管理に注意しながら換気を行う。
- (2) 多湿、寡日照条件下では病害が発生しやすく、収量・品質の低下につながるため、病害の早期発見と適期（予防）防除に心がける。
- (3) 病害葉及び病害果等は早期に除去しハウス外に持ち出して適正に処分する。



野菜のウイルス病まん延を防止しましょう

本県では「トマト黄化葉巻病」、「トマト黄化病」、「キュウリ・メロン黄化えそ病」、「キュウリ・メロン退緑黄化病」、「スイカ退緑えそ病」などのウイルス病が発生しています。これらの病気の原因となる各ウイルスは、コナジラミやアザミウマ等の微小害虫により媒介されます。

これからの時期は、野外の微小害虫の数は大きく減少し、野外からの侵入はほぼ無くなります。しかし、温度の高い施設内では冬期でも活発に活動し、12月の巡回調査でも「トマト黄化葉巻病」、「キュウリ黄化えそ病」、「キュウリ退緑黄化病」の発病株がみられているため、今後もウイルス病の発生拡大への警戒が必要です。また、地域におけるウイルスの伝染環（つながり）を断ち切るために、冬期においても施設外にウイルスを拡散させないようにする必要があります。そこで、以下の対策を必ず行いましょう。

I. 保毒虫を施設内で「増やさない」対策

施設内での感染拡大を防ぐため、施設内に残った微小害虫を増やさないようにしましょう。また、施設内での発病を抑えることで、栽培終了後に保毒虫が野外へ飛び出す危険性を減らしましょう。

- (1) 発病株は、重要な伝染源となるので適正に処分する。
- (2) 施設内に粘着トラップを設置し、害虫の密度を低下させる。
- (3) ウイルス病抵抗性品種であってもウイルスを保毒するため、微小害虫の防除を継続して行う。

II. 保毒虫を施設外に「出さない」対策

他の施設にウイルスを侵入させないために、栽培が終了した施設から微小害虫を逃がさないようにしましょう。

- (1) 微小害虫の施設外への飛び出しを防ぐため、必ず施設を密閉して植物を枯らす。
- (1) (2) 施設内の片付けは、密閉処理が終了してから行う。密閉処理期間はタバココナジラミは植物が枯れて1週間以上、アザミウマ類は地温15℃以上では2週間以上を目安とする。

III 【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想 (平年比)	発生概況及び注意すべき事項等
冬春 トマト	葉かび病	やや少	巡回調査では、発生を認めず平年比やや少(-)。発病に注意し、発病葉は伝染源となるので早期に除去し、処分する。
	すすかび病	やや少	巡回調査では、発生を認めず平年比やや少(-)。発病に注意し、発病葉は伝染源となるので早期に除去し、処分する。
冬春 ナス	うどんこ病	やや多	巡回調査では、一部多発ほ場が見られ平年比やや多(+)。多発後は、防除が困難なので初期防除を徹底する。
キュウリ	うどんこ病	並	巡回調査では平年並(±)。多発後は、防除が困難なので初期防除を徹底する。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

「<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>」

